

第6回朝食会ご報告



去る9月14日、第6回朝食会を開催いたしました。がん患者会のリーダーとして、ジャーナリストとして活躍していらっしゃる、読売新聞社社会保障部の本田麻由美記者に「患者になって見る医療～医者との意識の違い、米の不思議～」というテーマでご講演いただきました。ご参加の皆様には、雨模様の中お越しいただき誠にありがとうございました。

(要旨)

がん患者になり、病を得るということは3つの戦いであることを知った。不安との闘い、病気との闘い、そして社会・制度との闘いである。孤独な疎外感があり、仕事から疎外されるという不安、医師・家族に八つ当たりも出来ない状況が一番辛かった。自分の病気を知り、治療法を理解した上で選択しようというトレンドを、記者として何度も書いてきたが、実際には非常に難しい。怖さや不安が先立ってしまい、病気を正面から知ろうとできない患者さんも多いのだが、そういう部分に対するサポートは今の日本にはあまりない。全てを医師に任せるほうがよっぽど楽だと感じてしまうのも無理はない面もある。ただ、それでは思わしくない結果になった時、他者のせいにしがちだし、何より自分が一番苦しむことにもなる。また、セカンド・オピニオンもまだ取りにくい雰囲気はある。自分も待合室で取材ノートを取り出し、セカンド・オピニオンを取る言い出し方を何度も書いて練習したりした。さらに、病気には社会や制度との戦いもある。乳がん治療に関して、欧米では全摘と同時に行う乳房再建手術を選ぶのは当たり前ができるが、日本では人工乳房を用いた再建手術は保険診療にならない。どこかでやってくれるというロコミ情報が患者会では流れるが、あやふやな情報に惑わされることもあり、不公平感に患者たちは苦しむ。受きたい治療を受けられないことが理解し難い。

アメリカ研修の目的は、アメリカの良いところ悪いところ、患者のパワーなどを幅広く見ることであった。まず、医療というサービスに対する捉え方の違いに驚いた。日本では、政府が必要な医療サービスを準備する、命を守ることが当たり前と考えられていて、不足があれば国が悪い、行政の怠慢と批判する。一方で、無保険者を支援するアメリカの市民・

民間団体に、政府が皆保険をすべきかを問うたところ、皆保険がいいとは思わないという意外な答が少なくなかった。命に関わるので多くの人に保険を持つようにすべきだが、全て政府が準備するものだとは思わないというのだ。アメリカという国は、医療のようなもので、チャレンジの機会は保障するが、その結果まで保証するものではないという。

現在のように高度に医療が進み、選択肢が増え、一方で財源が有り余っている訳ではない状況では、乳房再建のようなことまで全てを保障するのは難しいのかもしれないが、日本でももう少し自由度があってもよいのではないかと思う。技術があるのに治療を受けられないということを納得できるだろうか？確かに、命に直結する医療を等しく保証することは重要だが。国の検討会などに出席していると患者の視点が欠けた議論がされているように感じる。

(質疑応答)

Q まずは保険制度の現状を明らかにしないと議論が進まないのではないかと思います。皆保険が無理ならどういう形にすればいいとお考えでしょうか？

A 現在の医療制度改革にある、混合診療の区分に関する話し合いを国民にもっと見える形にしてほしい。患者から遠いところの議論ではなく、納得できるようにしてほしい。

Q 静岡がんセンターを視察した際に、まずは医師と患者の信頼関係が重要で、うまくいかない部分を他のスタッフが補うと学んだ。がん患者になって、医師との信頼関係はどうでしたか？医師以外ではどのような人に相談しましたか？

A 乳がんのように長くがんと付き合わなければならぬ病気は、医師との信頼関係が本当に大切だ。病気のことを知りたくない患者もいるかもしれないが、医療技術の限界も含めて現在の医療というものを理解していなければ、医師への不信にもつながってしまう。患者が医療を理解することを助けるシステムが必要である。

Q アメリカは、社会を牛耳る一部の金持ちのエゴで、貧乏人には最低限の補償でいいとする考え方があるのでは？

A アメリカでは志のある人たちに話を聞いたので、もしかしたら歪んだ解答だったのかもしれない。彼らは政府以外のいろいろなところがいろいろなやり方で関わっていくべきと考えている。日本でも、全て国任せではなく誰かが誰かを支えるために立ち上がるべきだ。

Q 技術的に可能といっても、どのくらいの保障のレベルを目指せばいいのか？アメリカの人たちは国に任せるのを好まず、自分で決めるという自由を重視しているのだろうと思う。保障のレベルは誰に判断を任せるのがよいのか？日本の制度は、ずるいことをトライさせないように作られているのではないか？

A いろんな制度をいろんな立場からみると違う意見がある。制度のための制度でいいのかと疑問を感じる。

Q 政策決定プロセスに患者が関与することをルール化すべき。また、議論されたことを公表しただけでは、患者にとっての意味や重要性が理解しにくい。分かりやすく伝えるために行政に限らず様々な立場が支援すべきだ。

A 私も基本的に同意見だ。ただ、例えば患者代表をどう選ぶのか。患者たちの考え、意見をどう収集し、集約するのかという問題もある。そうした政策関連の議論に参加するためには、ある程度の知識も必要だ。こうしたことを支援するシステムも必要だ。